

学校通信

けやき小

教育目標

確かな一歩

e-mail

令和 7 年 9 月 3 0 日
西東京市立けやき小学校



e-keyaki@nishitokyo.ed.jp

由来を慈しむ

副校長 髙原 佐知子



今年の十五夜は 10 月 6 日です。平安の昔、人々は収穫に感謝し豊穰を祈り、澄んだ空に浮かぶ満月を愛でていました。季節行事の由来を知ることは、先人と私たちを結び、すがすがしさや敬虔な心を伝えてくれます。

さて、毎月の一日目「ついたち」と言います。もともと「月立ち（つきたち）」と言い、新しい月が始まる日を意味しました。旧暦では月の満ち欠けを基準に暦の月を決めていました。つまり、十五夜の空に丸々と輝いていた満月が日ごとに細くなり、見えなくなる日がその月の最終日でした。よって、「今日から少しずつ膨らんでいくぞ」という日が、新たな月の始まりの日となりました。先祖たちはこの日を「月が立つ日」と捉えて「つきたち」と呼び、それが「ついたち」となりました。由来を知ること、月の変わり目を新鮮な気分で迎えられるようになります。

また、先日一人の女の子が「これ、司書さんにもらったの」と、手作りのしおりを見せてくれました。夏の学校図書館開放の折に、学校司書さんが子どもたちに準備してくださったものでした。

「しおり」という言葉の由来をご存じでしょうか。山道を進む際、迷わないように木の枝を折って目印としたことを「枝折る（しおる）」と言い、

その行為から「しおり」という名詞が生まれました。昔の人にとって「しおり」とは、「あとで迷わぬように自分でつける印」というものでした。その意味が、本の読み進めに欠かせない目印としての「しおり」に受け継がれたのです。

本を開いた子どもが、そのしおりを見たとき、由来である木の枝と重なり、山道を進むための目印に見えたとしたらどうでしょう。深い山を探検するような思いで、読み進めることでしょうか。そして本を読み終えたときには、達成感や感動をより深いものにしてくれるはずです。

このように、私たちが普段使っている言葉は、かつて誰かが生み出し、多くの人々によって育まれてきたものです。言葉の由来を慈しむ心は、先人と私たちの心をつなぎ、同時に由来を知ること、何気ない一語が輝き出します。

秋の訪れとともに、本校の景色も毎日少しずつ表情を変えています。大人も子どももゆとりをもち、空の高さ、金木犀の香り、心地よい風、虫の音、人のぬくもりを感じ合い、言葉にできるひとときを大切にしたいものです。

10 月の読書週間には学校図書館前にて教職員のおすすめの本を紹介します。本と出会い、言葉と出会う場を通して、子どもたちが「言葉の由来を慈しむ心」を育み、日本語を話す喜びを深めていくことを願っています。どうぞ、保護者の皆様、地域の皆様にも、日々の口伝や読書を通じて温かく見守っていただければ幸いです。

